

セルフ・ヘルプ・グループを運営すること ある心身障害児者家族の会を例にして¹

正島 祐子

1、問題関心

初めて私がセルフ・ヘルプ・グループの存在を知ったのは、平成16年度前期の社会福祉研究での講義であった。講義で取り上げられたビデオを通してセルフ・ヘルプ・グループに参加している参加者の声を聞き、「知り合いや、親戚がいないほうが安心して話せる。」といった同じ傷を負った仲間だからこそ乗り切れることができると話す参加者の様子が映されていた。その会での雰囲気は参加者同士がわいわい楽しくおしゃべりをして会が進行していくという様子ではなく、その会のルールのような決まりごとの中で会が進行されていく。それがセルフ・ヘルプ・グループという組織にとっても興味を抱くようになったきっかけであった。セルフ・ヘルプ・グループは広くも狭くもとらえられる実におもしろい組織である。ここでは、セルフ・ヘルプ・グループを「病気の回復」といった福祉・保健や医療の観点から捉えるのではなく、セルフ・ヘルプ・グループをひとつの組織としてとらえセルフ・ヘルプ・グループに関わる人々がどのようにうまく組織を運営しているのかを見ていきたいと思う。

2、セルフ・ヘルプ・グループについて

2-1、セルフ・ヘルプ・グループの特徴

議論に入る前にまずセルフ・ヘルプ・グループとはいったいどのようなグループなのかを示していくことにする。セルフ・ヘルプ・グループとは岡知史によると「共通の困難な生活状況にある人々が、その共通した体験に関連する情報および感情、考え方をわかちあうために自発的かつ継続的に行う活動。『本人の会』ともいう。」(岡 1994: 640)と定義している。

ここでいう共通の困難というものは実にさまざまな種類があるが、その共通の困難を抱えた人々が組織しているセルフ・ヘルプ・グループが持っている特徴には何があるのだろうか。久保・石川らはセルフ・ヘルプ・グループの特徴を以下のように示している。

メンバーは共通の問題を持っている。 共通のゴールがある。 対面的 (face to face) な相互関係がある。 メンバー同士は対等な関係にある。 参加は自発的なものである。 専門家との関係はさまざまだが、基本的にはメンバーの主体を重んじる、な

¹今回のゼミ論文では筆者の卒業論文である「あるセルフ・ヘルプ・グループにおける組織の多面性」を一部修正して載せている。それによりタイトルも「セルフ・ヘルプ・グループを運営すること ある心身障害児者家族の会を例にして」と変更した。

どである。(久保・石川編 1998 : 8)

セルフ・ヘルプ・グループと限定せずともわれわれのまわりには例えば「学校」で考えるならば「PTA」という会がでてくるようにたくさんの組織が関わっている。それら組織、グループも共通の目的、共通のゴールを持って組織されているように思えるが、セルフ・ヘルプ・グループと呼ばれている組織が他の組織とは区別されるべきなのは、上記の特徴がより明確に示されていてかつ参加者の意識の中にもはっきりとそれが意識されているからであろう。そのため、セルフ・ヘルプ・グループをより厳密にとらえるために、岡は『『本人』たちが自分から作った会以外は『本人の会』と呼んではいけない。』(岡 1999 : 91)とセルフ・ヘルプ・グループがまず当事者(問題を抱えている本人)の集まりであることを強く主張している。ここには、セルフ・ヘルプ・グループと専門職との結びつきが関係している。次は専門職との関係について述べることにする。

2 - 2、セルフ・ヘルプ・グループと専門職者との関係

セルフ・ヘルプ・グループには多くの種類のグループが存在しているが、特に病気の人々のグループには、病院や医師や保健士との関係が深い場合がある。本来セルフ・ヘルプ・グループは当事者だけで会が成立、運営しなければならないといわれているが、実際には地域で支えてもらうために病院や医師や保健士がサポートをしているところもある。そのためセルフ・ヘルプ・グループと専門職者との関係は多く議論されており、伊藤・中田はセルフ・ヘルプ・グループと専門職者との関係で完全自立グループ、依存潜在グループ、依存顕在グループの3つにセルフ・ヘルプ・グループを分けている。完全自立グループは専門職から完全に自立して、当事者たちだけですべて運営しているグループである。セルフ・ヘルプ・グループの特徴からいえば、「本人」の会を忠実に守っているグループであるというよう。次に、依存潜在グループというのは代表者に当事者になっていて、一見すると当事者が運営しているように見えるが、実は代表者は専門職者の指示に従っているだけのグループである。最後に依存顕在グループは、代表者も専門職者で、会合を開く場所もその専門職者が属する機関であるというように専門職者が丸抱えのグループである。(伊藤・中田 2001 : 100)

どのタイプにしてもセルフ・ヘルプ・グループが自助組織として専門職者との関係をどう捉えていくのかが重要な焦点のひとつとなっている。

2 - 3、セルフ・ヘルプ・グループの機能

次にセルフ・ヘルプ・グループの機能として久保・石川は、「自己のアイデンティティの再建や、自尊心の回復」(久保・石川編 1998 : 40)を挙げている。岡によると多くのセルフ・ヘルプ・グループは同じ悩みを抱えている同士一定の場所に集まり、会を開き自らの体験を話し他の参加者の話を聞く。そこでは言いつばなし聞きつばなしが原則で、話して

いる参加者にアドバイスをする、会が行われている以外で話すといったことは禁止されている。これは抱えている困難を解決することを目的としているからではなく、その抱えている困難をどうプラスに変えていくかを目的としているからであるという。(岡 1999: 15)

しかし、実際に一つ一つのセルフ・ヘルプ・グループと呼ばれている組織を見てみると、その活動の規模、種類、内容は個々のグループで大きく異なっており、一言でセルフ・ヘルプ・グループといっても多様な会を含んでいるといえる。そのためにセルフ・ヘルプ・グループをある一定の基準において分類することが過去の研究者によっていくつかなされている。その一人であるカッツは、セルフ・ヘルプ・グループの分類をタイプ1からタイプ5までに分けている。(Katz, A.H 1997) タイプ1は、治療的グループである。具体的に、A, 精神保健に関する組織、B, 嗜癖に関連する組織、C, 疾病に関連する組織、D, 人生の役割変化に関連する組織、E, ストレス軽減グループの5つに分かれている。

例えば、ギャンブルがやめられなくなってしまいその人の生活に大きな影響を及ぼしてしまうところまでできてしまうと、ギャンブルは趣味では済まされなくなりギャンブル依存症という病気として捉えられることになる。そこでこの「依存」という病気を克服するために集まったグループはタイプ1に含まれるといえよう。

次にタイプ2は社会的アドボカシーおよびソーシャルアクションを目的としたグループを分類している。具体的に、A, 単一の問題を克服するために作られた組織、B, 高齢者に関連した組織、C, 少数民族を援助するために作られた組織の3つに分かれている。

例えば、自分たちが住んでいる町にダムを作らせないとといったような住民運動で起こった住民組織もカッツによればタイプ2に含まれる。

次に、タイプ3は少数者のライフスタイルをサポートするために組織されたグループである。具体的には、A, ゲイ解放組織、B, 都市型・田舎型施設共同体の2つである。

次に、タイプ4は24時間生活を共にするグループである。最後にタイプ5は混合タイプで、具体的には A, 刑務所出所者組織、B, 社会的・治療的なグループおよび家族志向グループ、C, 経済的援助の3つに含まれている。

表2 - 1、カッツによるセルフ・ヘルプ・グループの分類(久保・石川 1998より筆者が作成)

タイプ1	治療的グループ A. 精神保健に関する組織、B, 嗜癖に関連する組織、C, 疾病に関連する組織、 D. 人生の役割変化に関連する組織、E, ストレス軽減グループ
タイプ2	社会的アドボカシーおよびソーシャルアクション A. 単一の問題を克服するために作られた組織、B, 高齢者に関連した組織、 C. 少数民族を援助するために作られた組織

タイプ3	少数者のライフスタイルをサポートするために組織されたグループ A. ゲイ解放組織、B. 都市型・田舎型施設共同体
タイプ4	24時間生活を共にするグループ
タイプ5	混合タイプ A. 刑務所出所者組織、B. 社会的・治療的なグループおよび家族志向グループ、 C. 経済的援助

カツのセルフ・ヘルプ・グループの分類のように大きな視点で分類していく一方で、パウエルはセルフ・ヘルプ・グループの分類を以下のように分類している。(久保・石川 1998: 7)

まず、1つ目は習癖・依存の問題のグループで、例えばアルコール・アノニマス、スモーク・ストッパー(喫煙)、オーバー・イーター(過食)、賢く体重を減らす会(TOPS)、体重監視協会、ギャンブラー匿名協会などの特定の行動を変えることを目的とした組織がここに含まれる。

次に2つ目は広範な問題解決を目指すグループである。ここではさまざまな問題と対処パターンを修正する組織が含まれる。例えばペアレント匿名協会(児童虐待をする親)、回復者協会(精神障害回復者)、コンパショネイト・フレンド(子どもをなくした親)などである。

次に3つ目はマイナーなライフスタイルを持つ人たちのグループで、例えば配偶者に離婚・死別された人たちのグループがここに含まれる。

次に4つ目は当事者の家族のグループで、障害児の親のグループなどが含まれる。家族の重荷を軽減する目的で組織される。

最後に5つ目は身体に障害を持つ人たちのグループである。脳性まひ協会、てんかん協会、心臓手術者の会、オストミー協会(人工肛門増設者)など多種類の障害別にグループが組織されている。

表2 - 2、パウエルのセルフ・ヘルプ・グループの分類(久保・石川 1998より筆者が作成)

習癖・依存の問題のグループ	アルコール・アノニマス、スモーク・ストッパー(喫煙)、オーバー・イーター(過食)、賢く体重を減らす会(TOPS)、体重監視協会、ギャンブラー匿名協会などの特定の行動を変えることを目的とした組織
広範な問題解決を目指すグループ	ペアレント匿名協会(児童虐待をする親)、回復者協会(精神障害回復者)、コンパショネイト・フレンド(子どもをなくした親)

マイナーなライフスタイルを持つ人たちのグループ	配偶者に離婚・死別された人たちのグループ
当事者の家族のグループ	家族の重荷を軽減する目的で組織
身体に障害を持つ人たちのグループ	脳性まひ協会、てんかん協会、心臓手術者の会、オストミー協会（人工肛門増設者）など

このようにセルフ・ヘルプ・グループは、これら分類した以外にも、種類、組織の規模、質などの視点からも細かく見ていくことができる。

以上おおまかなセルフ・ヘルプ・グループの枠組みを述べてきたが、大きく言えば同じ悩みを抱えている人たちが集まりその困難・生きづらさを共に支えあいながら生きていく場がセルフ・ヘルプ・グループであるということである。その困難な問題が疾患や障害であれ当事者やその家族であれ、この部分は変わらないのである。

3、先行研究

次にセルフ・ヘルプ・グループを活動のレベルで見るとどうなるのか。セルフ・ヘルプ・グループの活動の分類軸として、野田は 活動のレベル 活動のベクトルの 2 本の分類軸を挙げている。

活動のレベルは、当事者個々人の抱える問題をどこで（どの範囲で）解決しようとしているかということであり、そこでは治療や訓練におけるセルフコントロールに代表されるような個人あるいは家族等のあくまで当事者内の責任の範囲内での「自己完結的な努力」と制度・施策の活用等のように社会的な取り組みとして解決を図ろうとする「一般社会のレベルでの解決・緩和」と両極とする軸が想定される。活動のベクトルは、問題の解決に向けての働きかけの対象をどこに求めるかということであり、節制等の自己犠牲をしたり、当事者個人を励ましたりという「自己内部の働きかけ」と制度化・施策化を要求して運動をするというように、社会に対して何らかの対策を講ずるよう働きかける「一般社会への働きかけ」が両極となる。（野田 1998：26）

そして、この 2 本の分類軸を掛け合わせることにより、セルフヘルプ・グループの活動のステージが出来上がってくるという。

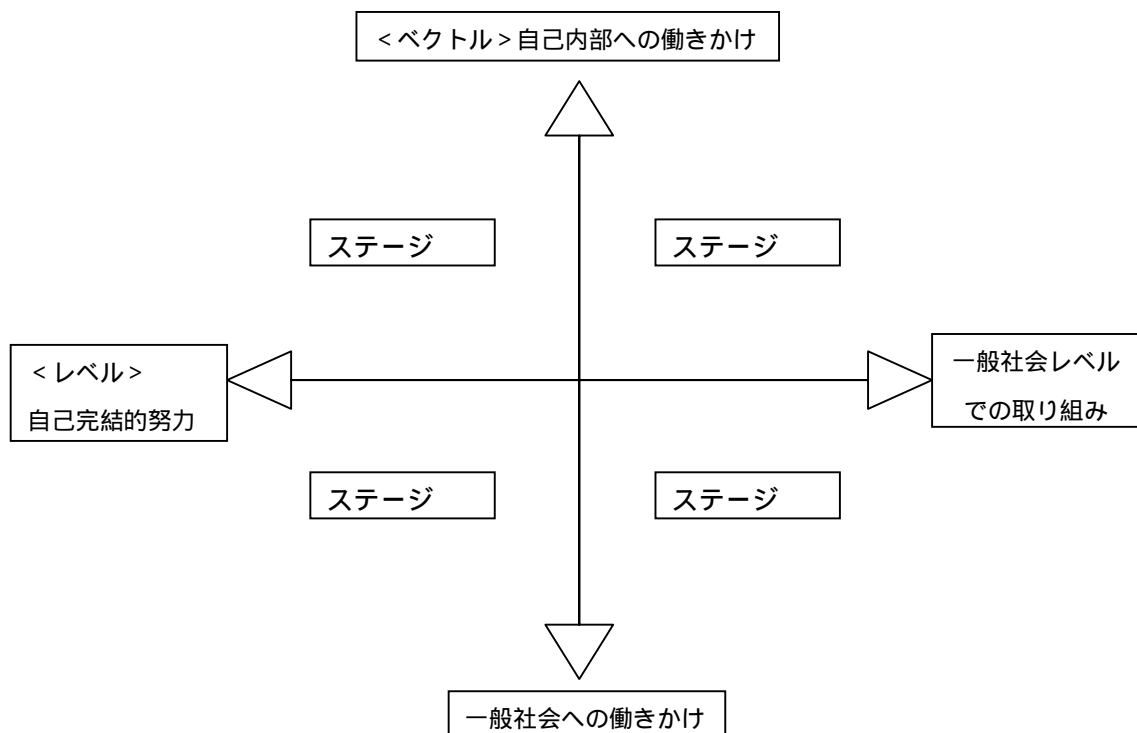


図3 - 1、セルフ・ヘルプ・グループの活動の4つのステージ（野田 1998：26）

ステージ は、レベルにおいては自己の力で問題を解決していくような活動がなされているグループが含まれる。なおかつ、ベクトルは自己内部への働きかけが大きいので、活動もグループ内でのメンバーの回復のサポート的活動が行われている。グループ内で体験談を話すことにより、共通の悩みを抱えているもの同士の絆を深めていく活動などがこのステージに入る。「個別化のステージ」ともいえる。

ステージ は、レベルはステージ と同じく自己の力で問題を解決していく場合であるが、ベクトルは一般社会への働きかけへ向いている。つまり、当事者が自己に対して解決していかなければならないならぬ問題を、自らに解決策を投じていくのではなく、社会に向けて解決策を訴えていくということである。野田は、キャンペーンにより当事者たちの社会的不利・不都合を一般社会へ訴えていくことを例に挙げている。

ステージ は、当事者の抱えている問題を克服し、自己を自立するために当事者の自己努力を支えていくような活動が中心のステージである。制度・政策等を活用し一般社会の取り組みにより自己解決を図ろうとする活動である。

ステージ は、一般社会で問題視されているさまざまな問題を自らの問題として認識し、共通の仲間とともに、その問題解決のために社会へ訴えかける活動がこのステージに当てはまる。野田は、あらゆるセルフ・ヘルプ・グループはおおむねこの4つのステージのいずれかでいろいろな活動を展開しているという。（野田 1998：26）

このことによりセルフ・ヘルプ・グループが実際どのような活動を行っているのか、ベ

クトルとレベルを軸に説明することで実際のセルフ・ヘルプ・グループ活動の場がおおまかに示されたように思う。

しかしあらゆる組織は、社会の流れや、その時に参加しているグループのメンバー、組織を取り巻く環境などいろいろな要因でたえず変化していかなければならないし、していくものである。それはセルフ・ヘルプ・グループにも言えることであり重要なことである。それはつまりこの図でいうとセルフ・ヘルプ・グループはある一定のステージにとどまることなく、ベクトル、レベルが移行し新たなステージに移行していくことがありうるということである。このことに注目して、実際のセルフ・ヘルプ・グループでは運営がどうなされているのか具体的に見ていきたいと思う。

4、調査対象の概要

X 県肢体不自由児協会 X 支部・心身障害児者家族の会について

今回調査を行ったセルフ・ヘルプ・グループは、X 県肢体不自由児協会 X 支部・心身障害児者家族の会「A 会」(仮名)である(以下 A 会とする)。A 会は、1986 年に発足し、保健婦の呼びかけで悩みを持つ親たちが集まったのが始まりである。10 家族で発足した会も現在は 30 人に増え、障害の種別はさまざまな障害児とその家族が参加している。現在は会員、家族の相互の親睦をはかりながら療育や福祉に関する研修や情報交換を行い、心身障害児者の福祉の増進と啓発活動を行うことを目的として掲げている会である。具体的な活動は施設見学、クリスマス会などの季節ごとのイベント、ボランティア活動、年 4 回会報の発行を主に行っている。これら会の活動を運営していくために、年度初めに行われる総会で一年間の活動計画を話し合い、会員の中から会長、副会長、会計、会報編集などの役員を決め、月に 2 回程度の役員会、または運営委員会を行っている。A 会は事務局を X 保健所においているので入会手続きなど事務的なことは保健所で行われている。入会するには 3000 円の年会費が必要である。A 会の活動費は主に会員からの年会費に加え、賛助会員²からの会費、支援団体からの支援金、X 県肢体不自由児協会からの補助金でまかなわれている。

表 4 - 1、A 会の活動の経緯

1985 年、同じ悩みを持つ家族が保健婦の呼びかけで集まる。
1986 年、A 会発足。
1990 年、会報第 1 号が発行される。参加者も 10 家族から 30 家族へ増加。
1995 年、音楽サークル活動 ³ を開始。
1998 年、住みよい街角ウォーク活動 ⁴ を開始。

²賛助会員とは A 会の活動に賛同し賛助会費という形で会に協力をしている会員である。

³障害を持った人でも使いやすいように楽器に加工がされている。民族打楽器やキーボード等の本格的な楽器がそろえてあり、週に 1 回の練習を行っている。

音楽サークル、地域の文化祭で初演奏披露。
 2002年、住みよい街角マップ⁵完成。
 音楽サークルが県よりボランティア賞受賞。
 2004年、地域の福祉ネットワーク⁶にA会も入会。

5、調査方法（インタビュー、役員会の見学）

5-1、インタビュー

A会の2005年10月、会長に連絡をし、研究目的を伝え、会長と他に承諾をいただいたA会のメンバー4人へのインタビュー調査を行った。インタビューでは匿名での調査ということで承諾を得ている。質問事項は以下の内容である。A会に入る前について（サポート面、情報収集など）A会に入ったきっかけについて（知ったきっかけ、理由、周りの反応）

A会について（印象、会に入って楽しいこと、苦労していること、変化したことなど）
 代表者として（運営上起こる課題）セルフ・ヘルプ・グループとしてのA会について（保健所との付き合いなど）⁷

会長へのインタビューは、2005年10月3日10時から約2時間、会長さんのご自宅で行った。われわれがインタビューを行った部屋では会長さんと私しかおらず、二回ほど電話がなり会長が席を立った少しの間、インタビューを中断しただけである。今回での記録は録音を承諾していただいたため、MDウォークマンでの録音と、メモで記録をとった。

その他の会員の方には翌日の役員会の合間にそれぞれ行った。記録に関しては会長と同じくMDウォークマンでの録音と、メモで記録をとった。

表5-1、（2005年10月インタビュー時点での）インタビュー対象者について

	性別	役員名	お子さんの年齢	お子さんの障害の種類・程度	入会してから の年数
会長	女	会長	中学1年生	脳性まひ、精神発達の遅滞	約9年
Aさん	女	遠足部長	小学5年生	自閉症	約6年
Bさん	女	副会長	小学1年生	視覚障害	約5年
Cさん	女	会計監査	20歳	脳性まひ	約18年

⁴当事者とその家族が実際に町にでて、車椅子で通れる道や段差がない道などを確認し障害者が利用しやすい店や道路などの情報を集める活動。障害者の視点で町をチェックする。

⁵住みよい街角ウォーク活動で得られた情報を情報誌としてまとめたもの。

⁶現在の会長はこの福祉ネットワークを設立させた一人であり、今回福祉ネットワークが設立したことでA会も入会した形となった。今後福祉ネットワークに参加することで他の団体や地域の福祉関係者とより連携していけるようになる。

⁷、 の質問は会長だけに行った質問である。

5 - 2、役員会の見学

A、B、Cさんへのインタビューは2005年10月4日の役員会の合間にさせていただいたので、そのまま役員会の様子を見させていただくことができた。

A会を運営していくために重要な役割をする役員会はX保健所で行われている。2005年10月4日の役員会の内容は、今度行われる親の親睦会の日程・内容の話し合いと日本肢体不自由児協会/各道府県肢体不自由児協会主催のイベントで 地区の小学校・中学校・高校へビラ配布の分担決めであった。

役員会の様子

午前十時会長が部屋へ到着し、パソコンで次回に行われる勉強会の案内を作りながら他の会員が来るのを待っている。

午前十時十五分 Aさんが部屋に到着。このあとだんだんと会員が集まり始める。役員会は午前十時定刻に始まるわけではなく、仕事や家の用事で遅く来る会員もいれば逆に仕事や家の用事で早く帰る会員もいる。そういった参加者の増減はあったものの午前十時三十分過ぎから話し合いが始まった。

ビラがきちんと小学校・中学校・高校ごとに分けられているかチェックし、皆で誰がどこへ行くのかを話し合う。親睦会についても担当の会員が何をするか、どこに行くかと他の会員に聞きながら話を進めていた。

役員会の雰囲気は実に明るく笑い声がたえない。黙々と話し合うのではなく、コーヒーを飲みおしゃべりをしながら話している。そして驚いたのはそれぞれがそれぞれの事をしながら、しかし話し合いは進められていることだった。一つ一つを皆で丁寧に確認していくというよりもそれぞれが自分の役割をこなしていきながら役員会が進んでいるといったような感じである。少ない時間の中でてきぱきとしかも笑い声を交えながら役員会が進んでいく様子は見ていてとても興味深いものであった。

6、分析

組織を動かすとはいったいどういうことなのか。まさか組織自体が自由に形を変えるのではない。変えるのは組織の会員である。その中でももっとも組織を動かす役割を担っているのは会長である。A会の会長はリーダーとして組織をどう動かしていったのだろうか。

6 - 1、リーダーとしての組織運営

会長は実に多忙な毎日をおくっていらっしゃる方である。インタビュー時にスケジュールの確認で先数週間のA会、その他の会の予定をおっしゃただけでもかなりの数であった。本当にお忙しいですね、と話すところ「そうでもないですよ。」と笑っていらっしゃった。インタビュー時にも「A会は一応代表やし、W会も一応副...副(代表)ぐらいで。W会は頻繁にということではないし、地域の福祉コーディネーターさん主宰にいるんな事務でい

うか、運営のほうはしてくれてるんで、要所要所で話させてもらうくらいな程度で（参加している）」（インタビュー記録資料5ページ参照）とすべてが頻繁に出ないといけないわけではないことをおっしゃっていたが、すべてをこなしていくのは大変な労力が必要である。

現在の会長が【会長】⁸となったのは1998年である。8年会長を務め上げていらっしゃる⁹が、会長がA会の代表になられてから、A会内外で今までとは違った取り組みや変化が起こっている。これはつまり会長のリーダーとしての成果ともいえる。はたして会長はどのようにして会を動かしていったのか。以下では、「組織におけるリーダー」である会長のA会の運営からヘルフ・ヘルプ・グループ内で起こっている活動の変化を捉えていくことにする。

まず、リーダーが所属しているのは「組織」である。また似た言葉で「集団」という言葉があるが、それぞれどういった言葉なのか。船橋によると、

狭い意味での組織とは、二人以上の人々が共通の目標達成を志向しながら分化した役割を担い、統一的な意思のもとに協同行為の体系を継続しているものをいう。この意味での組織は集団の一種であるといえるが、一貫した指揮系統を持つことによって集団とは区別される。（船橋 1988：566）

つまり、二人以上の人々が共通の目標達成を志向し相互作用しているという集団の地位と役割が、より分化したものを組織というのである。A会もその意味では二人以上の人々が共通の目標達成を志向しお互い相互作用している集団といえるが、A会内で役員や担当を決めていることから組織に近いといえる。

そういった集団内でのリーダーの行動に関して、古川は職場集団を統率する第一線管理者を対象とした調査研究で次のようなメカニズムによって、リーダー行動が発生してくることを示している。

リーダー（管理者）はまず、自分があずかる職場集団の状況を把握する。また集団状況の自分にとっての有利性についても判断する。

その状況把握と有利性の判断に基づいて、職場集団をどのような状態にしたいか（あるいはすべきか）についての「目標」を設定する。

ひとたび目標設定がなされると、リーダー（管理者）は、その実現・達成に向けて動機づけられ、実際に行動を起こす。その際に、自分が掲げた目標の実現に最も貢献す

⁸「現在の会長」と、役職名の「会長」が混同しやすいので後者を【会長】と記す。以下【会長】は役職名である。

⁹A会の役員は2年任期である。2年ごとに役員改選が行われ、年度初めの総会をくぎりに新体制となるシステムになっている。

る（役立つ）と思われるリーダーシップ行動を選択し、行使する。（古川 1988：137）

このリーダー行動のメカニズムを参考にして、会長は会の代表になってからどういった目標を立て行動に移しているのかをみていくことにする。以下では状況把握、目標設定、行動選択、成果をキーワードに読み解いていくことができる。

【会長】につく

まず【会長】に就いたときについて、会長の場合「前任の方が都合で任期の途中で辞める」ことになり【会長】を二年任期という A 会の決まりに沿って順調に決めただけではなく、ある意味 A 会の不測の事態で次の【会長】が選ばれることとなった。前【会長】が辞めた後「それに変わってじゃあ一年だけということで引き継いだ方がいる」が年齢を理由にその中で年齢が若い会長がどうかという役員会での話の方向により、会長が次の【会長】に選ばれることとなった。【会長】に就いたときの様子を「ちょうど私もそのときに役員会に出てた人間だったんで、そんで役が回ってきたという感じで。そのときも私も他にそんな役をしているわけではなかったし、実際この会が意義深いと感じたんで、自分の気持ちにも合うなって感じてたんで、先輩の方がサポートしてくれるなら¹⁰ということでそれさせてもらったんです。」と会長にとって時期【会長】がまわってくるのは想定範囲だったようだ。【会長】を断る理由もそれほどなくむしろ積極的な受け入れである。

状況把握

A 会に限らず、セルフ・ヘルプ・グループ一般にも言えることだが、会を維持していくためにはある程度の会員の確保が必要である。A 会も例外ではなく会員の確保は A 会全体としてもひとつの課題であった。会長は、A 会のメンバーが減った時の状況についてこう語っている。

こう（資料に記載されている長く会に入っている二人の方の名前を指しながら）いったらこの二人が長老なんですよ。長く入ってる二人で、このときに保健婦の方が召集してすぐたくさんの方の会員、さっきも 40 人いるっていったけど、そういう年齢層の方々が（会に）いたわけね。そしたらやっぱりだんだん歳上になるにしたがって辞めていく、結局（資料をさしながら）肢体不自由児協会を書いてあるんだけど、県の考え方としたら児までなんですよ。だけど私らはそうじゃないと。別に年齢関係なしにずっと入っていた人は入っていたらいいんやていうんでこういう付属の形をとったんやけど、でも学校を卒業した後、作業所とかいろいろ施設に入った後、会に参加できへんやったりとか、そこの活動が忙しくなるということもあってそういう人たちはやめて、それによってたくさんの方がやめていったんです。（インタビュー記録資料 11 ページより引用）

¹⁰会長が A 会に入会したころは年上の方が多く、すごく会長にとって頼りになる存在であったという。（インタビュー記録資料 6 ページ参照）

A 会の場合、A 会の設立当初からいる会員が一気に辞めていったことが会員の減少につながるひとつの原因であった。そこで、肢体不自由児協会の支部という枠組みを一旦取り除く、つまり肢体不自由者の親のセルフ・ヘルプ・グループとしての枠組みを新たに作り出すことにより、子どもの年齢が高くなった親たちも A 会に参加できるようにしたのである。しかし、この方法は直接的には会の会員の減少をとめることにはつながらなかった。なぜならば、会を辞めていった会員のほとんどは「学校を卒業した後、作業所とかいろいろな施設に入った後、会に参加できへんやったりとか、そこの活動が忙しくなるということもあって」というように会に参加できない要因が他の活動の忙しさにあったからである。そこで会を運営していく【会長】の立場から生じた「会員の確保」という課題に対して、会員を減らさないではなく会員を増やすことを解決策として課題達成を行うように考えていった。

目標設定

会員を増やすためには新たな会員を A 会に誘わなければならない。そのためにはどうすればいいのか。会長は「魅力ある活動内容にしていって新しい人にも入ってもら」と考えた。それでは「魅力ある活動内容」とは具体的にはどうしたらいいのか。そこで会長は「社会的な活動」を行うことは A 会の魅力となるのではないかと考えた。ここでいう「社会的な活動」とは、「親睦の活動みたいな、みんなで会費集めてちょっと補助金とかもらって楽しい行事しようとかね、遠足しようとかクリスマス会しようとかそういうお楽しみ系」の活動ではなく「社会（その他の障害者やその親、社会一般の）参加活動」と会長はとらえている。それは会長のやりたいこととも通じることであった。なぜ会長のやりたいことといえるのか、それは会長が他の重度障害者の会と A 会の違いについてこう述べていることからうかがえる。

重度で仕切ってしまうという活動よりかはもっといろんな障害の人たちがいる中で活動していきたい、柔軟な会で楽しみたいなのというのがあって、ほんなかでいろんな情報も交換するし、知らん情報もあるし、直接関係なくてもね。そんなかのでできること増やしていったらいいし、いろんな子が一緒に活動できるならば、今度はもっと広げれば健常な子とも一緒に活動できるし、という風な感覚、そういう会の活動、社会に溶け込んでいける活動をしたいなという気がしたので...やっぱり自分がしたいことにつながってくる会におりたいなという気がして。(インタビュー記録資料 4 ページより引用)

会長は、「社会に溶け込んでいける活動をしたい」そういった活動が A 会ではできるということを会長は多くの会がある中で A 会を選んだ理由としてあげている。これは会長自身が A 会に入る前から思っていたことでもある。

このことから、【会長】という立場から A 会の会員を増やすために行う課題と自分自身のやりたいことがその課題解決法としてうまくかみ合い、会長による今後の A 会の目標設定が「社会的な活動」になったと思われる。

行動選択

こうして会長は「社会的な活動」の実現・達成に向けて、実際に行動を起こすこととなる。ひとつは「社会的な活動」を行うための体制の見直しである。体制の見直しとは会長が【会長】になってから行われたものでそれまでは会員の中から役員として会員を選びその役員が中心となって A 会に関する活動を話し合うスタイルであったが、今回から会員すべてが各恒例行事（学習会、勉強会など）の部員として参加させるしくみになった。全員が会の役員になってもらうのである。この体制の見直しにはどういった目的があるのだろうか。

やっぱりねこういう会っていうのはボランティアで動いている会だから、学校の PTA でもそうなんだけど役員しか動かんようになってくるのよね。だからそれはやっぱりいかんし、負担も役員だけにかかってくるし、でもこの役員は結構楽しんでしている。やっぱり企画とかする自体が楽しいからみんなでやってるといふ部分があるから。ただやっぱりなんやかんや雑用とかふりまわされたら大変やというのもあるし、みんなの意見をくみ上げんやったら企画してこの(役員)メンバーだけでやっていくんはいかんし、だからみんなの意見もくみ上げるという意味でも行事の担当になってくださいということで、全員にどっかの行事の担当になってくださいよということで入ってもらってるんです。だから明日(の役員会)は勉強会と親睦会の相談になっているんですが、これも勉強会の運営委員さん、親睦会の運営委員さんにもできるだけ来てもらうようにしてるんですが、でもねみんなね仕事を持っているということでね、なかなか来れんこともおおいんやけどその場合はこの担当の行事部長が連絡網で頭になっているんで、下に流す時になんか意見ある？て聞いてきてもらうという形をとっていく。だからこれの人には来てもらうていうようにしています。(インタビュー記録資料 10 ページより引用)

それはおもに 3 つの目的が考えられる。一つ目は、「全会員に目標・課題を認識させる」目的である。ただ行事に当日参加するだけでは、会にどういった目標があつてどういった活動をしていかなければならないのかはみえにくい。しかし A 会全会員が A 会すべてのことに対して把握する必要はないし、そうした場合は会を動かすのに多くの時間がかかる。そのため何かひとつでも A 会の活動の決定に関する際に参加することで、そこから A 会全体を考えるきっかけになると考えられるからだ。二つ目は、「役員だけで A 会を回さない」目的のためである。入ったころの A 会の様子を「上層部の役員だけで都合で行事を回しているという雰囲気は強かった。」という。「だからそうでなくてなんかしていきたいなと。」い

うように会長は考えていた。「みんなの意見をくみ上げる」ことも「役員だけで回さない」ことの理由であったが、翻っては「役員だけに負担をかけない」ことにもつながる。会員全員から意見を聞くことと一人ひとりの役員の仕事の負担を減らすことの二つのメリットが生じる。三つ目は「会の楽しさを感じてもらう」目的である。「こういう会って仕事でないし、それを楽しいとか意味があるとかそういうことをするって大事よなって思えなかったら盛り上がりたのよね。」(インタビュー記録資料 14 ページより引用)と話すように会が活気づいて活動を行うため必要なものに、会の内容や会のやり方の側面と同時に意識の側面も挙げている。このことから三つ目は意識の側面を変えていく目的として考えられる。会の行事に参加するだけでなく会の企画の時点でかかわりを持つことで、以前に増して A 会と会員の距離が縮まるものにしていくことができる。

今まで述べてきた体制の見直しが「社会的な活動」を行うための対策である。では実際に「社会的な活動」として会長はどのような行動をしてきたのだろうか。新たな活動として「音楽サークル活動」の開始、「街角ウォーク活動」が挙げられる。音楽サークルができたのは平成 8 年だが音楽サークルは現在に続く A 会の活動のうりとなっている。しかし音楽サークルができた当初は「中だけのサークル活動」としての位置でしかなかったという。クリスマス会で発表するくらいだったのが、会長は「それをそうじゃなくてもうちちょっといろんな人にも聞いてもらおうよしてたんが初めてここの地域の文化祭で発表したんが平成 10 年だったと思うんですけど、そういうことを地域の人たちにも聴かせるというか、まあ社会参加活動という意味づけをつけてきたというのがそのあたりから。」というように A 会の会員だけで発表、聴くだけではなく社会一般の人にも聴いてもらおうと行動してきたのがわかる。また住み良い街角ウォークやそれでできた街角マップもひとつの活動として一定の期間行われていたものである。「私らは当事者の会で人に支援してもらおうような気がするけどそうじゃないよな、私らでもできることあるん違う?っていうことで」取り組んだというこの活動も会長の「社会に溶け込んでいける活動をしたい」という思いをみごとに実現させた活動のひとつであった。

また音楽サークルや街角マップ作りのような新たに活動を増やすのではなく今まで続いていた A 会の活動を、より「社会的な活動」にするための取り組みも行われている。会長が入って初めのころについて「当時は会員だけの親睦会がほとんどだったんです。」と語っていた。これからうかがえるように A 会ができた当初からの活動に「学習会」があるのだが、それも A 会会員内での学習会であった。それから会長が【会長】となり一般の人を含めての勉強会を行うなど既存の活動にも会長の目標を取り入れた活動内容に変化させている。

成果とそれに伴う新たな状況把握

音楽サークルも新たな A 会の活動として定着し、音楽サークルが県よりボランティア賞受賞するまでの社会での活躍となった。音楽サークルの発表の場も増え、「社会的な活動」

を実現していく場も増えていった。新会員も A 会に入会し、A 会が新たな方向に進んでいくこととなる。

しかし、課題の達成により新たに A 会の問題も生じている。インタビューで会長は「去年かな春の役員決めるときに私（【会長】）降りたいていったんよね実は。そのときになんか全部私の荷にかかってきているような気がして、しんどかったというのもあったりしてたのでね」と話している。会長の目標としていた「社会的な活動」は会を維持することに加え新たな会の活動を作り上げていくことであった。それは会長にとって意義深く自分のやりたいことであったが、その分会長が先頭に立って切り開いていかなければならず会長にとってそれが大きなプレッシャーになっていたのである。会長は「代表になってからはこうなったらいいなあとしてきたんやけど、来年（2006年）改選になるし、前のときが変わってもらおうと思ってたんやけど、変わってもらえるかというのもあるし、いずれ変わっていくんやけど…」と語っている。役員改選で、「代表を変ってもらえるのか」ということが会長にとって【会長】を降りることができない要因になっているようである。

「まあそこからここ2年でもう一度（A会の代表に）」と会長は2004、2005年もう一度【会長】をすることとなった。自分がしていきたい活動をしてきて、実現させた部分もある。しかし会長は今のA会には会長以外に主体的に動いてくれる会員が少ないように感じていた。

目標設定

次の目標はどういったものなのか。改選のとき【会長】を降りられないことの理由に次の代表がないことを語っていた。どうしたら次に【会長】をバトンタッチすることができるのだろうか。会長は「みんなが主体的にやっていけるようなA会」を作り出していくことが一番の目標の実現・達成になるのではないかと考えた。

行動選択

「さっきの行事ので、みんなが役員になるっていうのはね、何年かずっとしてきてるんだけど行事の担当者っていうのにより動いてもらうようにしたんです今年（2005年）はね。」と、ただ仕事の分担を増やすことではなくその会員にA会に関する決定権の機会を増やすことで活動を積極的に取り組んでもらうようにしたのである。

成果

インタビューを行ったころは2005年10月で、2005年も終わりに近づき来年新たな改選が行われるというところであった。会長はインタビューの中で

みんながそれぞれ動ける形になってきたかなって。だからそのことによって私の肩の荷もおりたし、みんなに任せていけるというかみんなが主体的にしていく。たとえば役員

会にもし私がいけなくても決めていってもらえるというかなんかそういう風なところにちょっとようになってきているんで、だからそういうことができるようになってきたらだれが上にたってもやっていけるかなと思うんで、まあそういうところにもって行って次の方にバトンタッチできたらいいなあと。(インタビュー記録資料 14 ページより引用)

と語っていた。会長は「みんなが主体的にやっていけるような A 会」という目標の達成にまずまずの手ごたえを感じているようである。

来年新たな【会長】が選ばれることは単に【会長】が変わっただけではなく A 会自体もまた新たな一歩を踏み出すことになる。

まあだから A 会もここまできてるから過渡期がいろいろあったとおもうんやけどね。そこからへんで、まあ私もどうなっていくかはわからないけど思うね。お互いがお互いを障害違っても仲間を思いやれる仲間作りになったらいいなとは思いますがね。(インタビュー記録資料 14 ページより引用)

「お互いがお互いを障害違っても仲間を思いやれる仲間作り」これこそが会長の思う A 会の目的である。それぞれそのときの【会長】や会員によって行われる具体的な活動は違ったとしても、この目的を大切に A 会が続いていくことを会長は願っているのではないだろうか。

6 - 2、運営上の課題

ここでは、A 会と保健所とのあるトラブルをみることによって A 会運営上のひとつの課題をみていくことにする。

セルフ・ヘルプ・グループにとって活動する場所を確保するというのは、活動を運営していく上で非常に大切である。スペースの確保だけではなくそこには会議室を使うのにお金がかかる場合もあるため一から場所を探すことは金銭面で難しいことでもある。セルフ・ヘルプ・グループによっては病院などの方から場所を提供してもらえるグループもあるが、専門職とセルフ・ヘルプ・グループがどの程度関わっているのかという程度にもよる。A 会の場合、月に 2 回行われる役員会は X 保健所の一室で行なわれていた。A 会にとって保健所は A 会の事務局が設置されている場所であり、活動の場所を提供してくれる以前に A 会と強い結びつきがある。会報の第一号で当時の会長は「途中消滅しそうな時期もあったが保健婦さんと会員の熱意で危機を乗り越えて今回の機関紙発刊がまるで夢のようだ」(1990 年 2 月第 1 号)と記していることから、A 会の当初は A 会の存続のために保健婦が A 会の支えになっていたようである。

しかし、保健所のつながりが長い中で、2001 年までクリスマス会を保健所で行っていたのが、年間行事計画に「クリスマス会 会場探しが、第一関門！保健所は日曜日使用でき

なくなりました。100名ほどが利用できるいいところありませんか？」(2002年5月第30号)と記載され、2002年からは実際にクリスマス会が別の会場で行われている。(2002年7月第31号)場所が使えなくなることは、A会にとって活動場所を新たに変えなければならないことであるが、そういったA会を支える外部との関係について会長はインタビューで以下のように答えている。¹¹

保健所からするとね、手を離そう離そうとしているのね。それが目に見えているというか、それにたいして私らはなぜだろうと思うわけよね。だけど一方で冷静に考えてみると、そういう団体が自分たちの力でやっていけたらそれはそれでいいことやなていうことは思うんだけど、なんかそこらへんに、なんていうのかな最初はなんか保健所に段取りしてもらったときながら、力をいただきながらしてきとったのになんかこうそこに矛盾した気持ちがみんなの中には存在するわけ。例えば活動場所にしても保健所今使ってるけど、だんだんと今使えない状況になってきてる。今役員会は使わせてもらってるけど、土日も今まで使ってたんですよ。そしたら土曜日、日曜日は保健所閉めるので、だから土日が使えないとなるとクリスマス会とかやる場所をどっかさがさなくちゃならなくなる。そういった問題点が毎年毎年ぼつぼつぼつ出てきてる。でまあ今も役員会使ってもらってるけど、車がたくさん(駐車場に)とまるとかいろいろ文句いわれてとか、いろんなことがあって、そういう意味ではとても活動しにくく、実際はしにくい。まあだけど、一方で私ら自立した活動としてみていくとね、それはそれで自分たちで確保し、資金的にも自分たちで確保して、していくべきなんかと。そういう思いは少なくとも私はね思ったりしています。でもそれがただ単に保健所の業務が増えたとかこういったグループと行政団体をまったく切り離して考えるのもどうなんかなと思ったりもしてる。だから今までだったらうちの会だけでなくいろんな会が保健所の会議室を利用してたんですよ。だけどそれを全部排除していったわけ。部屋を使えないという形で。A会とあと一個あるかないかぐらいちゃうかな、結局A会さんはよく活動しているからということで使ってもらってる感じなんよね。だけど逆にそこには上下関係があると思うの、その言い方にはね。だけどその保健士さんとしたら私たちの会から得られる情報もすごくあると思うし、それを保健士さんはわかっているんですよ実際はね。ただ組織の中の一人だから上から言われたらそれをどないかせないかんということになってしまって、気持ちとは矛盾した動きを言わなざるを得なくなるというか、そういうことがあるわけなの。だからうちとしてはすごく微妙なの。もともと今も協会の事務局は県においでるでしょ。だからそういうことで行政との、本当はね願わくは二人三脚でいけたらいいんじゃないかって。どっかで思ってるんだけど、でもそうやっていわれたら自立した会にせんといかんのかなとすごく矛盾、もやもやした思いは今持ちながら。そういう意味ではまったく手を切ることによって私らにとって生じてくる不利益もあると思うの。不利

¹¹ 線を引いている箇所は注目するところとして筆者が付け加えた。

益というのは実際、役員会の場所を使わせてもらえないということもあるんやけど、今社会的な活動をどんどんしていこうとしているでしょ。でその中で例えば県の企画のイベントを知ることができるとかあるでしょ、そんなところに私たちにこんなことができるのがあるよとか、言うのがいいやすいというか、それをスムーズにやり取りできるのがある。だからただ単に駐車場が使ってもらったら困るとか、場所使ってもらったら困るとかそういう風なレベルでなくて、それはそれで開いたら使ってもいいじゃないというところはあるしね、なんていうのかな、完全に切り離すのが自立ではなくて、自立させるというならそこには関係に格差があると思うんね。だからそういう考え方じゃなくて、お互い社会の福祉の関係だったら努力している部分があって、それを合わせていくとかねそういう見方をできたらいいなっていうのはうまくいえないんだけど思う。行政のシステム上で離していくんじゃないってね。

会長は、保健所が使いなくなるという環境の変化によって、現在の A 会と保健所との関係を問い直し、A 会が今後進む(移行する)べき活動の仕方、A 会のあり方を模索している。そこには、「自立」が、「A 会との関係をたつもの」として用いられ、会長が今後のあり方を語る際に起こるジレンマを説明する言葉として使われている。

7、考察

このような会長による A 会の組織の変化によって、A 会の活動のベクトル、レベルはどのように変わったのであろうか。先行研究で挙げている野田の 4 つの活動のステージの図と照らし合わせてみる。

まず会長が【会長】になる前の A 会の活動はどのようなものだったか。会長はインタビューで「当時は会員だけの親睦会がほとんどだったんです。だから一般の人を含めての勉強会とかは企画してないとおもうけどね。」と答えていることから、会員同士での活動が主に行われていることがわかる。レベルの軸で言うと個人あるいは家族等のあくまで当事者内の責任の範囲内の「自己完結的な努力」に近い。また、親睦会¹²は「自己内部の働きかけ」が強いことからベクトルはより上であることがわかる。したがって、活動のステージで表すと「ステージ 1」であるといえる。

では会長の組織運営後の活動のステージはどこであるといえるだろうか。具体的に会長が新たに取り入れた活動に「街角ウォーク活動」「街角マップ作り」などがある。街角ウォーク活動は障害者の視点で町をチェックするという活動であるため問題を町の中に見つけ、それを街角マップとして A 会員以外にも情報を提供するといったことから、レベルの軸では一般社会レベルでの取り組み、ベクトルでは一般社会への働きかけが強いことが言える。

¹²親睦会とはインタビューで会長が「親睦の活動みたいな、みんなで会費集めてちょっと補助金とかもらって楽しい行事しようとかね、遠足しようとかクリスマス会しようとか」と答えていることから、ここで A 会においてはこれら行事を指していると考えられる。

活動のステージで表すと「レベル」であるといえる。

このことから、A会の活動のステージは会長が【会長】になる前となった後では「ステージ」から「ステージ」への活動の変化が起こっているのではないだろうか。

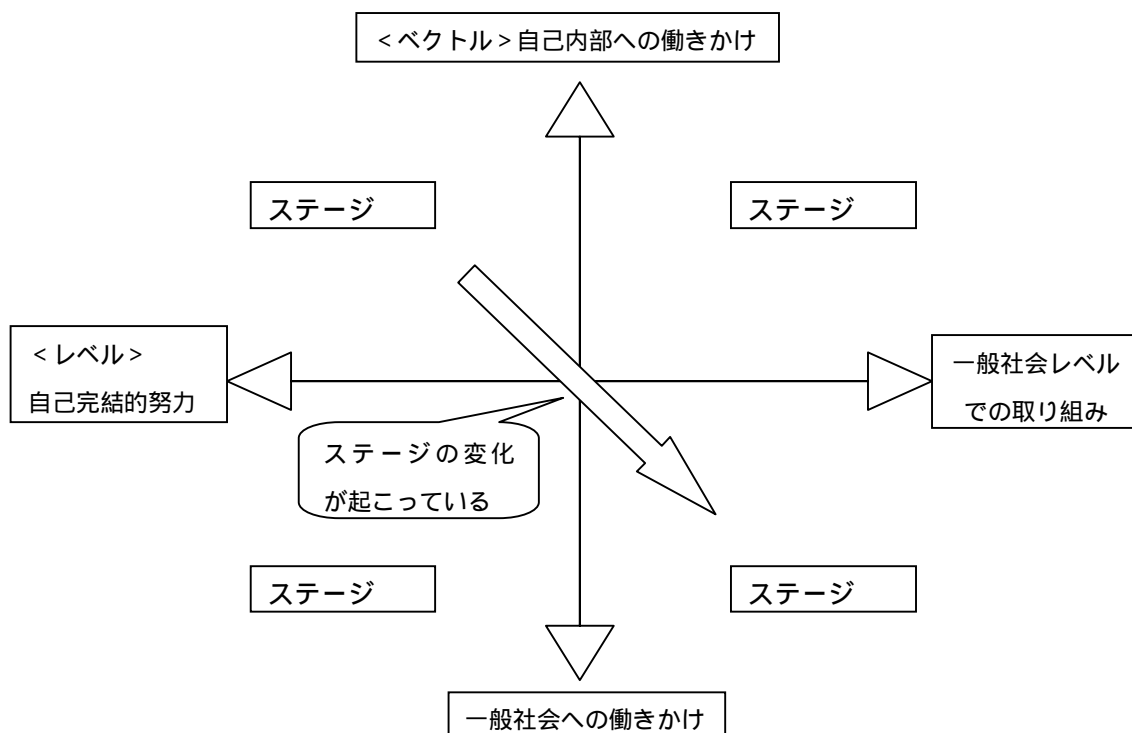


図7 - 1、活動ステージの変化（筆者が作成）

8、まとめ

組織の変化を会長のリーダー行動でみていくことで、会長としての課題と前から思っていたやりたいことが上手にマッチしたことがA会の組織の活動を実際に変えていく要因になっていたことが明らかになった。またセルフ・ヘルプ・グループの運営を活動のステージの変化を通して見ていくことで、具体的にどのような運営がセルフ・ヘルプ・グループ内で行われているのかが明らかとなったのではないだろうか。

【参考文献】

長谷正人編、1999、『セルフヘルプグループ 1998年度社会調査実習報告書』千葉大学文学部行動科学科。

、2002、「セルフヘルプグループの調査実習から「個別的苦しみ」をめぐる社会学の可能性」大村英昭編『臨床社会学を学ぶ人のために』世界思想社、24-46。

橋本文子・樫田美雄、1999、「ライフコースとセルフヘルプ・グループ あけぼの会（乳がん患者のセルフヘルプ・グループ）T支部幹部へのインタビュー調査から」『徳島

- 大学社会科学研究所』第12号
- 平野かよ子、1995、『セルフ・ヘルプグループによる回復 アルコール依存症を例として』川島書店。
- 福重清、「セルフヘルプ・グループの物語論的効果再考 『回復』することの曖昧さをめぐって」『現代社会理論研究』14：304-317。
- 船橋晴俊、1988、「組織」in 見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学辞典』弘文堂：566-567。
- 古川久敬、1988、『集団とリーダーシップ』大日本図書。
- 伊藤伸二・中田智恵海編著、2001、『知っていますか？ セルフヘルプグループ一問一答』解放出版社。
- 伊藤智樹、「『語り』の共同体 アルコール依存の相互作用論的分析」『現代社会理論研究』6：13-28。
- ジョージ・サーサス著 前田泰樹訳、2000、「行為における組織を研究すること」文化と社会編集委員会『文化と社会 第2号』株式会社マルジュ社、37-73。
- 患者のネットワーク編集委員会編、2000、『病気になった時すぐ役に立つ相談窓口・患者会1000』三省堂。
- Katz, A.H 著 久保紘章監訳、1997、『セルフヘルプ・グループ』岩崎芸術出版社。
- 小林幸一郎・梅澤正編、1988、『組織社会学』サイエンス社。
- 久保紘章、1988、『自立のための援助論 セルフ・ヘルプ・グループに学ぶ』川島書店。
- 久保紘章・石川到覚編、1998a、『セルフヘルプ・グループの理論と展開』中央法規。
- 編、1998b、『セルフヘルプ・グループ活動の実際』中央法規。
- 野田哲郎、1998、「セルフヘルプ・グループ活動の6つの志向群 セルフヘルプ・グループ活動のタイプの分類」久保紘章・石川到覚編『セルフヘルプ・グループの理論と展開』中央法規、21-38。
- 岡知史、1999、「セルフヘルプグループ」in 庄司洋子・木下康仁・武川正吾・藤村正之編『福祉社会辞典』弘文堂：640-641。
- 、1999、『セルフヘルプグループ』星和書店。
- 大久保考治・嶋崎尚子、1995、『ライフコース論』日本放送出版協会。
- 佐藤慶幸・吉田裕・吉川栄一、1968、『組織社会学』学分社。
- 心光世津子、2005、「アルコール医療とセルフヘルプ・グループ」山中浩司編『臨床文化の社会学』昭和堂、269-295。

徳島大学総合科学部社会学研究室報告 既刊（国立国会図書館等所蔵）

- | | | |
|----|--|------------|
| 1 | エスノメソドロジーとその周辺
- 平成9年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 - | 1998年3月発行 |
| 2 | ラジオスタジオの相互行為分析
- 平成9年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第二版) - | 1998年10月発行 |
| 3 | エスノメソドロジーと福祉・医療・性
- 平成10年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 - | 1999年2月発行 |
| 4 | 障害者スポーツにおける相互行為分析
- 平成11年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第一版) - | 2000年2月発行 |
| 5 | 日常生活の諸相
- 平成11年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 - | 2000年2月発行 |
| 6 | 現代社会の探究
- 平成12年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 - | 2001年2月発行 |
| 7 | インタビューと対話の相互行為分析 気配りと配慮の社会学
平成14年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第一版) | 2003年2月発行 |
| 8 | インタビューと対話の相互行為分析 気配りと配慮の社会学
平成14年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第二版) | 2003年9月発行 |
| 9 | 社会学の窓 - ドラマティックな日常生活 -
- 平成15年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 - | 2004年2月発行 |
| 10 | 義肢・装具のエスノメソドロジー
- 平成16年度徳島大学総合科学部地域調査実習報告書 - | 2005年2月発行 |

生活の中の相互行為

(平成17年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 -)

発行日 2006年2月14日

編集 榎田美雄

〒770-8502 徳島県徳島市南常三島町1丁目1番地

(088)656-9308 E-mail:Kashida@ias.tokushima-u.ac.jp

<http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/social/index.html>

発行 徳島大学総合科学部社会学研究室

印刷・製本 平成17年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール
